

# 新学習指導要領の解説

## —高校・地理—

近畿大学 教職教育部 教授 戸井田 克己

平成21（2009）年3月9日、新しい高等学校学習指導要領が公示された。本稿では、平成25年度から年次進行で実施に移されるこの新学習指導要領（高校・地理）のおもな変更点や特徴等について概観する。

### 1. 改訂の基本的な方向

まず、改訂の基本的な方向について確認しよう。

地理歴史科としての科目構成、科目ごとの標準単位数、必修科目の指定等、地理歴史科全体としての基本的な枠組みについては、現行学習指導要領（以下、学習指導要領を単に「要領」と表記する）をすべて踏襲したかたちとなっている。そのうえで、おおむね以下の諸点が強調された。

#### 1) 実生活と結びついた学習

とくに地理Aで、地理学習と実生活との結びつきを強めるために、「防災」や「地域調査」に関する学習が新設・充実された。

#### 2) 世界地誌学習の拡充

とくに地理Bで、世界の地理的認識をある程度網羅的に深めるために、「世界地誌」に関する学習が拡充された。

#### 3) 探究学習の導入

地理A・Bの共通事項として、「課題を探究する学習」が新設された。これは日本史、世界史とも共通する基本的な方向性である。

#### 4) 資料活用力・表現力のいっそうの重視

地理A・Bの共通事項として、地図を活用して事象を説明したり、自分の解釈を加えて論述や討論をしたりするなどの学習活動がいっそう重視された。これは日本史、世界史とも共通する基本的な方向性である。

### 2. 地理Aのおもな変更点

#### 1) 目標

まず、現行要領（平成11年版）と新要領（平成21年版）とで、地理Aの目標を比較してみよう（下線は筆者）。

#### ■〔平成11年版「地理A」の目標〕

現代世界の地理的な諸課題を地域性を踏まえて考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う。

#### ■〔平成21年版「地理A」の目標〕

現代世界の地理的な諸課題を地域性や(a) 歴史的背景、日常生活との関連を踏まえて考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる(b) 日本国民としての自覚と資質を養う。

このように、今回の改訂では目標の趣旨そのものはほとんど変わっていないことがわかる。つまり従前同様、①現代世界が抱える（地理的な）諸課題が主たる学習対象とされていること、②「地理的見方・考え方」の獲得を重視していること、③国際社会で主体的に生きられるだけの自覚と資質の育成が究極目標であることなどが、新しい地理Aの目標にも引き継がれている。

そのなかで、変化しているのは下線を引いた箇所である。このうち(a)は、従前の目標表現が抽象的でやや言葉足らずであった点を、具体的な手立てを示すことでよりわかりやすくしたものと見える。具体的には、「歴史的背景」「日常生活との関連」という2点が示されているが、前者は従前、内容の取扱いで強調されていたものを、今回はじめて目標に取り入れたものである。後者は今回初出の事項だが、内容で重視される「防災」や「地域調査」の先触れとしての役割を持たせた

ものと考えられる。

(b)では、従前の「日本人」を「日本国民」と書き改めている。両者のニュアンスの違いについて、すぐれて政治的なにおもするが、教育基本法には「教育は国民の育成を期して行われる」(第1条・教育の目的)と、「国民」の語が使われており、これとの整合を図ったものとも見られる(ちなみに、平成18年当時、同法の改正による教育の右傾化が話題となったが、改正以前から「国民」であった)。いずれにせよ、地理教育に大きな影響を及ぼすとは考えにくい、両者の違いはどこにあるのか、なぜ変更する必要があったのかについて、『解説書』で教えてほしいものである。

## 2) 内容

内容の骨格を平成11年版と21年版で比較すると、つぎのように変化している。

### ■ [平成11年版「地理A」の内容]

#### (1) 現代世界の特色と地理的技能

- ア 球面上の世界と地域構成
- イ 結び付く現代世界
- ウ 多様性を増す人間行動と現代世界
- エ 身近な地域の国際化の進展

#### (2) 地域性を踏まえてとらえる現代世界の課題

- ア 世界の生活・文化の地理的考察
- イ 地球的課題の地理的考察

### ■ [平成21年版「地理A」の内容]

#### (1) 現代世界の特色と諸課題の地理的考察

- ア 地球儀や地図からとらえる現代世界
- イ 世界の生活・文化の多様性
- ウ 地球的課題の地理的考察

#### (2) 生活圏の諸課題の地理的考察

- ア 日常生活と結び付いた地図
- イ 自然環境と防災
- ウ 生活圏の地理的な諸課題と地域調査

目標の趣旨が変わっていないのだから、内容にも大幅な変更はない。そのなかで、今回の内容構成を従前のものと比較すると、以下の諸点に大きな特徴が見出せる。

従前は、(1)で現代世界の基本的な認識(ここに地理的技能の獲得を含む)という方法論の土台の上に、(2)で現代世界の諸課題を地理的に考察するという目的論を位置づけていた。これが新要領では、(1)をグローバルスケールの地理的考察に、(2)をローカルスケールの地理的考察にというように、地域スケールの大きさによって再編成した。

これにより、従前の設定では地域調査が含まれる(1)－エの位置づけにやや不自然さがあったが((1)全体として大小の地域スケールが混在していること、また、地域調査のねらいを「身近な地域の国際化の進展」の把握に限定させていることなど)、これらの点が新要領では改善された。

また、「生活圏」という概念を大きく取り上げ、ローカルスケールの地理をより充実させたことで、単に「国際化」の問題にとどまらず、広く地域調査を位置づけることを可能にした。くわえて、「自然環境と防災」という新しいテーマの設定にも、これが無理なくつながっている。今後は従前以上に、現代世界の諸課題を「グローバル」(グローバルとローカルを合わせた造語)な観点から考察させるような授業が求められることになろう。

## 3) 内容の取扱い

内容の取扱いも、内容と同様、主として「構成上の改善」ということを意図して組みかえられた跡がうかがわれる。言い換えれば、抜本的な変更点として指摘できるものはそう多くはない。そのなかで特徴的な事項を、意味合いの大きなものから順に示せばおおむね以下になるろう。

- ①事例・地域の選択学習の指示が撤廃されたこと。
- ②「教科用図書『地図』」の活用が明記されたこと。
- ③「ハザードマップ」という用語が初出したこと。

## 3. 地理Bのおもな変更点

### 1) 目標

地理A同様、まず、地理Bの目標の違いについて比較してみよう。(下線は筆者)

### ■ [平成11年版「地理B」の目標]

現代世界の地理的事象を系統地理的、地誌的に

考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う。

#### ■〔平成21年版「地理B」の目標〕

現代世界の地理的事象を系統地理的に、(a)現代世界の諸地域を歴史的背景を踏まえて地誌的に考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる(b)日本国民としての自覚と資質を養う。

下線部が新要領での変更点であって、目標について指摘できることは、地理Aの場合とまったく同様である。すなわち、目標の趣旨に大きな変更はなく、従前の曖昧さを改善するかたちで言葉が補充されたということが出来る(下線部、(a)の「諸地域」と「歴史的背景」)。これらの語を挿入することで、肝心の系統地理的な考察と地誌的な考察に際しての、対象上・方法上の違いがきちんと定義づけられた。

ここで、地理Aのところでも言及した「歴史的背景」という語について若干補足しておきたい。

地理Bにおいてもこの語は、従前から内容の取扱いで強調されてきたものだが、それが今回目標に取り入れられることで、いっそう重視されるかたちとなった。また、この語が地誌的考察との絡みで使われていることは、いわゆる「動態地誌」を暗に指していると考えられる。動態地誌とは、単に「その地域を理解するためのもっとも特徴的な指標を重視した地誌」ではなく、本来は、「その地域を理解するためのもっとも特徴的な指標が形成されるプロセスやメカニズムを重視した地誌」と説明されるべきものであろう。地理教育にあっても、今後はプロセス(歴史的展開)がいっそう重視される必要があるとの考えが、これら地理A・Bの目標に込められているといえよう。

## 2) 内容

内容の骨格を平成11年版と21年版で比較すると、つぎのように変化している。

#### ■〔平成11年版「地理B」の内容〕

##### (1)現代世界の系統地理的考察

- ア 自然環境
- イ 資源、産業
- ウ 都市・村落、生活文化

##### (2)現代世界の地誌的考察

- ア 市町村規模の地域
- イ 国家規模の地域
- ウ 州・大陸規模の地域

##### (3)現代世界の諸課題の地理的考察

- ア 地図化してとらえる現代世界の諸課題
- イ 地域区分してとらえる現代世界の諸課題
- ウ 国家間の結び付きの現状と課題
- エ 近隣諸国研究
- オ 環境、エネルギー問題の地域性
- カ 人口、食料問題の地域性
- キ 居住、都市問題の地域性
- ク 民族、領土問題の地域性

#### ■〔平成21年版「地理B」の内容〕

##### (1)様々な地図と地理的技能

- ア 地理情報と地図
- イ 地図の活用と地域調査

##### (2)現代世界の系統地理的考察

- ア 自然環境
- イ 資源、産業
- ウ 人口、都市・村落
- エ 生活文化、民族・宗教

##### (3)現代世界の地誌的考察

- ア 現代世界の地域区分
- イ 現代世界の諸地域
- ウ 現代世界と日本

地理Bにおいても、地理A同様、目標の趣旨が変わっていないのだから、本来は内容に大きな変更が生じるわけではない。しかしながら、従前の要領が持ったある種の「不都合」を打ち消すかたちで、ある程度大きな見直しが行われた。

「不都合」とはややきつい言い方になったが、従前要領では、(1)の系統地理的考察と(2)の地誌的考察を方法論的な車の両輪に位置づけたうえで、(3)の現代世界の諸課題の地理的考察という最終目的を達成するとい

う筋立てが取られていた。

論理的にはよくできた構成ともいえるが、これで実際に授業をしてみると、(1)と(2)で扱う基礎論と、(3)で扱う応用論とが重複することがあった。また、(2)の地誌的考察の三つの地域スケールの中に格差が大きいため、とくに「(2)－ア 市町村規模の地域」が浮いてしまっていた。さらに、地理の見方・考え方の基礎をなすはずの「地理的技能」が、地理Bではまったく抜け落ちていたという「不備」も指摘されていた。

新要領は、以上の不都合や不備を修正して、従前からの目標を引き継ぐなかで、その目標を確実に達成しようとの観点から内容構成が図られている。そのため、(1)の「様々な地図と地理的技能」を地理学習の土台として位置づけ、そのうえで、(2)では系統地理的観点から、(3)では地誌的観点から、それぞれ学習すべき内容を再編成した。このようにすることで、地域調査が単なる地誌学習の一環としての位置づけから解放され、地理的技能の一部をなすものとして、より重い地位を与えられた。

また、最後の学習項目である「(3)－ウ 現代世界と日本」に、新たに「探究学習」を位置づけたうえで、「我が国が抱える地理的な諸課題を探究する活動を通して、その解決の方向性や将来の国土の在り方などについて展望させる」(下線は筆者)と地理B全体の学習を結んだ。

ここでとくに注目すべきは下線部である。探究学習(従前の要領での用語は「課題追究学習」)はこれまでも強く求められてきたものだが、ともすれば生徒主体の学びが置き去りにされがちであった。今回、「探究する学習を通して」と一歩踏み込んだ表現を取ること、学びにおける生徒の主体性をいっそう強く、はっきりと要請している。

### 3) 内容の取扱い

内容の取扱いも、地理Aと同様、主として「構成上の改善」ということを意図して組みかえられた跡がうかがわれる。言い換えれば、抜本的な変更点として指摘できるものはそう多くはない。そのなかで特徴的な事項を、意味合いの大きなものから順に示せばおおむね以下になるよう。

①事例・地域の選択学習の指示が撤廃されたこと。

②偏りのない世界地誌学習が要請されたこと。

③「教科用図書『地図』」の活用が明記されたこと。

## 4. 地理歴史科における地理の位置づけ

今回、世界史・日本史・地理相互の関連づけをいっそう図ることが、各科目の目標で示された。すなわち、世界史A・Bでは「地理的条件や日本の歴史と関連付けながら」という表現で、日本史A・Bでは「地理的条件や世界の歴史と関連付け」という表現で三者間の関連づけが明記された。

このうち、世界史・日本史相互の間では従前から同趣旨の表現が目標に見られたが、おのおの地理に対しては、内容の取扱いで「地理的条件との関連への留意」を促すにすぎなかった。世界史・日本史における目標での記述は今回がはじめてである。

世界史が地理との連携を深めるのは、制度上は世界史必修による地理の不履行を補う意図からである。しかし歴史研究の方法論上は、現に世界史(日本史も)において見られる地図の利用拡大や、空間的思考法の要請、「諸地域世界」「交流圏」等といった歴史概念の採用が、地歴相互の補完性をいっそう必要としている点が重要である。

高校地理はさらに向こう10年、足かけ30年にわたって選択科目として辛酸をなめることとなった。しかしこれに反し、歴史教育(歴史学)における地理の重要性はいっそう増すばかりといえよう。

## 5. 中学校地理的分野との接続

先行して公示された中学校学習指導要領(平成20年版)でも、①地誌学習の拡充、②自然災害や防災教育の導入、③歴史的背景の強調、④地域調査のいっそうの重視、⑤資料活用や発表・表現力の向上等、高校地理と同様の観点から地理学習の改善・充実が図られている。これは一方で、中・高校間の接続性の向上と見ることでもできようし、他方で、重複事項の増加と見ることでもできよう。

しかしいずれにせよ、高校地理がまるまる一世代にもわたって必修からはずれることが決まっただけで、中学地理の教育課程に、従来以上に高い完結性が求められているということではできるのかもしれない。